

概要報告

実施期日	令和7年8月4日(月)
部会名	小学校 総合的な学習の時間部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

主体的に学ぶ子の育成

『子どもたち自らが問いを追究する学習をめざして』

提案概要

本研究は、「主体的に学ぶ子の育成ー子どもたち自らが問いを追究する学習活動をめざしてー」をテーマに進めたものである。児童が主体的に「問い」をもち、「追究」し、「表現」することを学習の柱とし、特に6年生では『地域の未来を担うわたしたち』という単元を通して、本市の子育て支援施策を題材にした探究的な学びを展開した。

学習は、①保育園との交流（体験的理解）、②市役所職員との対話（制度的理解）を中心に構成され、計58時間の単元で実施。児童は自身の興味関心をもとにアンケートや調査活動を計画・実行し、最終的に本市の子育て環境についての提案を市役所の職員にプレゼンするなど、地域と連携した実社会的な学びを深めた。

「自ら問いをもち、試行錯誤しながら課題を解決する力」や「公共的な視点をもって意見を形成・発信する力」の育成を目指す本実践は、児童が自らの考えに責任をもち、試行錯誤を経て改善していく姿が見られ、将来的な社会参画への素地を育むことにつながった。

質疑応答

- 子どもたちが困難に直面した際の教師の対応について
教師が根本的な解決策や対応策を教えるのではなく、子どもたちの思いを最優先にしたサポートを行った。
 - 保育園での活動において
子ども同士の意見交換を促すことで、互いの考えを理解し合える環境を整えた。また、保護者からの助言も活動に取り入れ、家庭との連携を図った。
 - 市役所との関わりにおいて
子ども同士の意見交換を重視しつつ、教師が必要に応じて助言を行い、活動の方向性を明確にしていた。
- 探求課題の設定に向けた児童アンケートの活用について
事前に実施したアンケートでは、「小さい子どもとの交流を望む声」が多く寄せられていた。この結果を受けて、学習活動の一環として保育園との交流を実践し、子どもたちの希望を学習に反映させた。
- 子どもたちが自ら問いをもち追求する力の育成に向けたプロセスについて
 - 知識を深めることで問いを深める。事前学習や調査活動を通して知識を蓄積し、それにより「なぜ?」「どうして?」という問いがより本質的・多面的なものへと発展した。
 - 実際に関わった現場の方々（保育士や市役所職員など）の声に耳を傾け、そこから得られた気づきを基に次の活動を計画し、追究を継続していった。

協議の柱及び協議概要

本研究協議では、以下の2点について意見交換を行った。

特に「問いの立て方」「学びのプロセス」「単元構成におけるゴール設定の必要性」などに焦点を当て、実践上の課題と改善の方向性について話し合った。

1. 児童・生徒の主体的な学びを生み出すための工夫

・問いをもたせるまでの難しさについて

子どもが自ら問いを立てることは容易ではなく、そこまでの導き方が難しいという意見が多数出された。「テーマ → 人（対象） → 疑問 → ゴール」という学びの流れを明確にすることで、自然と問いが生まれやすくなるのではないかと提案があった。また、学習の過程でプロフェッショナルや地域の人々と関わることによって、現実感や目的意識が高まり、問いを立てやすくなるという意見も共有された。

・テーマが決まっている場合の課題について

あらかじめテーマが決まっている場合、児童生徒が主体的に問いを立てることが難しくなる傾向がある。そのため、「決められたテーマの中に自分の問いを見出せるような導入の工夫」が重要であるとされた。

・「やりたい」を大切にする姿勢について

子どもたちの「やりたい」「知りたい」という思いを尊重することが、学びの原動力となる。教師が子どもの興味関心を丁寧に受け止め、広げていく姿勢が、主体的な学びの土台となるという意見があった。

2. 小中学校の総合的な学習の時間の単元の作り方

・単元構想の考え方について

単元を構想する際には、「ゴールを設定するかどうか」について様々な意見が交わされた。明確なゴールを設定することで、学習の見通しを立てやすく、子どもたちが目標を意識しやすくなるという利点がある。一方で、ゴールを固定しすぎると、子ども自身の問いや学びの方向性を制限してしまう可能性もあり、「ゴールは学びの中で子どもたちと共に見出していくもの」と捉える柔軟な視点も重要だとされた。

・小中連携の視点について

小学校・中学校それぞれの発達段階を踏まえながら、問いの深まりや学びの継続性を意識した単元設計の必要性が確認された。特に中学校では、小学校で培った「問いをもつ力」をさらに発展させるような活動構成が求められた。

まとめ概要

協議を通じて、児童生徒の主体性を尊重した学びを実現するためには、「問い」から学びを始め、地域や専門家など「人との関わり」を通して探究を深めていく学習プロセスの設計が重要であることが確認された。

また、単元構成におけるゴールの設定は、あらかじめ固定するのではなく、学習の過程で子どもたちと共に見出していく柔軟な姿勢が求められるとの意見が共有された。さらに、指導主事から、学校教育目標や学習指導要領に基づき、子どもたちに「何ができるようになってほしいか」という視点を持ち、育てたい資質・能力を明確にすることの重要性が指摘された。そのうえで、子ども自身がその力を身に付ける過程で自ら探究課題を見出せるように導いていくことが総合的な学習の時間の大きなねらいであるとされた。

今後の課題として、小中の連携をさらに意識し、系統的な探究活動の充実を図ることが挙げられ、それらを支える教員には、学習を共に創る立場として、子どもの問いを引き出し、深め、つなげていく「ファシリテーターとしての力」がこれまで以上に求められるという提言もなされた。

以上の内容を踏まえ、今後の実践においては、子ども一人ひとりの問いや興味を起点とした探究を尊重しつつ、教員がその学びをデザインし支えていく姿勢が求められる。